
スマイル メイド

珈琲紅茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スマイル メイド

【Nコード】

N9182P

【作者名】

珈琲紅茶

【あらすじ】

仕事の都合でアメリカに行く事になった両親。当時、六歳だった少年はメイドたちのおかげで楽しく生活している。

十六歳になった少年はとても美形になっていた。メイドたちは彼に釘付け。メイドたちを釘付けにするのは単に美形だからではなく彼の人間性に惚れ込んでいた。

鈍感な彼を取り巻くハチャメチャラブコメディ！

ブローグ

「ごめんね、リクト。お母さんたち仕事でアメリカに行かなきゃならないから当分は帰ってこれないの」

「僕、ひとりになっちゃうの？…そんなのやだよ」

「すまないリクト。でもお前が寂しくないようにここにはメイドがたくさんいる。…わかってくれるな」

「…うん」

「ありがとうリクト。…じゃあ行ってくるわね」

「…お母さん、お父さん」

「リクト坊ちゃん、私も私たちメイドがいつまでもそばにいます。」

「うん。ありがとう」

六歳くらいの頃に両親は仕事で海外にいる。休みは皆無で家に帰ってくる事はない。最初こそ寂しかったものの数百人いるメイドたちのおかげで楽しく寂しいと思う事はなくなった。勉強でも学校に通う事はなくメイドたちが教えてくれる。おかげで学歴はないが学力に心配はない。

月日は流れ十年後

第一話：カリカリ朝ご飯

「…朝か。もう少し寝よ」

コンコン♪

「失礼します。リクト様、朝でございます。そろそろお目覚めした方がよろしいかと」

彼女の名前はミラ。セミロングでカチューシャをしている。

「んゝまだ眠いよ。もう少しだけ」

「しかしリクト様」

「起きたってする事ないしさあ」

「そんなあ私たちメイドを構ってくれても」

「じゃあミラも一緒に寝る？」

「／／／え／／／そ、そんな！！」

「冗談だよ。なんか目が覚めたし起きるかー」

「え、あははそうですよね。冗談ですよね」

最後の方はよく聞き取れなかった。

体を伸ばしベッドから降りる。ミラに目を向けると下を向いていた。

「どうしたミラ？気分でも悪いのか。だったらわざわざ起こしに来なくていいのに。」

「リクト様は朝起こされるの迷惑なんですか？」

少し涙目になりながらミラは言ってきた。

「そんなわけないだろ。いつもミラが起こしてくれるから助かってるよ」

「本当ですか？とても嬉しいです」

ミラの涙を指で拭きながらミラに言う。

「ミラ着替えてから広間に行くから先に行っててくれ。」

「着替えなら手伝いますよ。パンツも取り替えましょう」

「うん。先に行ってくれ」

ミラは少しふてくされながら部屋を出てった。

やっと自己紹介ができる。オレの名前は倉原リクト。両親はアメリカにいます。家はすごい豪邸で数百人のメイドがいても部屋は埋まらないし、庭も広いし文句なしだね。部屋もだいぶ広いしひとりで使うにはもったいないだろう。金持ちを除けば普通の十六歳だ。メイドたちは全員年上だからで世話上手だ。少しおせっかいだけど…。

「もーリクト様ったら。着替えくらい手伝わせてくれてもいいのに。でも…」

リクトのほめ言葉を思い出しながら不気味な笑い方をしながら広間へ向かうと朝食の準備をメイドたちがしていた。

「ミラどこ言ってたんだよ？もしかしてリクト様の所に」

「リクト様の寝顔は最高だったわよ」

「ズリーぞてめえ」

ミラと話しているのはルリ。ポニーテールでモデルみたいに足が長い。

「いいじゃない。早いもんがちよ」

「朝の仕事までサボって」

「失礼ね。仕事を終えてから起こしに行ってるにきまつてるですよ」

「はいはい。言い争いはそこまで。早く準備しなさい」

この人は数百人いるメイドを束ねるサナ。腰まである長い髪と巨乳が特徴。

「だってサナ姉ミラの奴が」

「わかったから。ミラ、リクト様を好きなのはあんただけじゃな

いの。みんな好きなんだから抜け駆けしないこと。ほら準備するわよ」

ミラとルリはふてくされながら準備を始めた。

「はあ広すぎだよこの家。広間までどんだけ歩かせるんだよ」

愚痴をこぼしつつ広間に着いた。大きな扉を開ける。

「おはよう、みんな」

笑いながらメイドたちに挨拶をする。

広間には長い机がいくつもありメイドたちは自分の席の前にひとりずつ立っていた。わかりやすく言えばハ？・ポッターみたいな長い机だと思っただくれればいい。

「「おはようございます。リクト様」」

メイドたちは声を合わせて言う。

「うん。いつも準備ありがとう。みんなも食べよ」

オレの言葉にメイドたちは席に着き食べ始める。オレは正面の席に座りその斜め左右にメイドたちは奥まで座っている。

オレに近ければ近い分だけ位が高いらしい。メイドたちが勝手に決めたらしいが…。

「みんな今日はやけに静かだね。なにかあったのサナ？」

斜め左すぐにいるサナに聞いてみる。

「はい。今朝ミラがひとりでリクト様を起こしに行ったので皆、

嫉妬しているのです。」

「嫉妬？なんで？」

「そ、それは…」

リクトはすごい鈍感なのだ。

「まあ朝わざわざ起こしに来なくていいよ。大変でしょ」

「そ、そんなあ」

リクトの言葉にミラは立ち上がった。

「だって大変でしょ。それにミラはみんなより早く起きて仕事してるし」

「き、気づいていらしたのですか」

「まあね」

「リクト様それでは私たちはリクト様の寝顔を――納得がいかないのです」

サナの言葉に少し疑う部分があったかもしれないがそれは置いていて。

「うーん。じゃあ朝起こしに来たい人どれくらいいるの？」

“ビシッ”

全員の腕が一斉に上がった。

「ま、まじ！？」

「まじです」

「まあたしかにみんなに起こされた方がオレも助かるけど…」

「そうですね♪」

ミラが目をキラキラさせながら立ち上がった。

「大声だすなよ。下品だぞ」

「下品のアンタに言われたくないわ」

「なんだとッ」

「やめなさい！！二人ともリクト様の前だぞ」

「申し訳ありません。リクト様」

「いいよ。気にしないで。ところでどうする？」

「そうですね。いっそのこと我々が一緒に寝るといふのは」

「却下だな！」

「そんなあつさり言わなくても」

「さすがに朝はマズいだろ」

「そんな事ありません。昔はよく一緒に寝たではありませんか」
「小さい時の話だ。結論が出ないから当分は朝起こしに来なくていいよ」

「そんなぁ」

ミラたちは下を向いてしまった。

「たかが起こしに来るだけでしょ」

リクトがそう言うとみんな一斉に

「「たかがじゃありません」」

「そっかありがとう。まあとりあえずご飯食べよ」

みんな少しカリカリしながら朝食を終えた。

第二話：何して遊ぶ？

「ふう食べた食べた。ヒマだし片付けの手伝いでもするか」
皿洗いでもしようと厨房へ向かった。

「リク様どうしたのですか？こんなところに」

この人は副料理長のユカ。髪を横で結んでいる。

「ユカなにか手伝おうと思っ「リっちゃんヤッホー」なにしてるのー」

小奴は料理長のアミ。リボンで髪を結んでいるのが特徴。
背後からいきなり飛びついてきた。

「わあー！お、降りろアミ」

「なにしてるの！アミ。リクト様に失礼だろ」

「もおユカは頭が堅いな」。スキンシップだよ。ね、リっちゃん」
」

「後ろから飛びついてくるのはやめてくれ。心臓が止まる」

「んー考えとく」

（（やめる気ないなコイツ））

リクト、ユカは同じ事を思った。

「ところでリっちゃんなににきたの？」

「あゝ片付けの手伝いに来たんだ」

「もう終わったよ」

「え！だつつ食べ終わってまだ二十分だぞ」

「見くびらないでよ。リっちゃん」

「すごいな。みんなエライよ」

「じゃあご褒美のキスでももらおう「ちょっと待ったー！さっきから聞いてればあんなにやってんの！」」

ミラを含めたくさんのメイドが寄ってきた。

「だからスキンシップだって」

「あと呼び方もすげー失礼だし」

「ルリなんて言動そのものが失礼のくせにー」

「なんだとッ」

「たしかに」

みんな声を合わせて賛同する。

「賛同すんじゃねー」

「ルリ呼び方には特に気にしていないからいいんだ。ルリも呼びやすい呼び方で呼んでいいから」

「ありがとうございますリクト様」

「リっちゃんは優しいね」

「そんな事ないって。でも手伝う事がないとなるとヒマだなあ」

する事がなくリクトが困っていると遊びを提案する声が聞こえた。

「リっくん遊びの事なら任してよ」

張り切ったものを言ってきたのは小さい頃からよく遊んでくれたソラ。

「任してよってなにかする事でもあるの」

「もっちゃん」二人で体で語り合うの。リっくんも興味あるでし

よ
♀
「

「／／／ソラそれって」「わたしに言わせるき」

「／／／いや、その」

「わあやめろソラ！」

「そうだ！ズリーぞ」

「やるなら長であるわたしだろ」

「リっちゃんわたし胸デカいよ」

「リク様を料理するのはあたしです！」

「お前らいいかげんにしろー！」

顔を赤くしながらみんなに言った。

「とりあえずそんな事しないから」

「リっくん男なんだから素直になればいいのに」

たしかにメイドたちはみんな可愛いからそうゆう事を考えなくもない。

「とにかくやらない！普通の遊びにしよう」

「普通の遊びってなにがありますか？リクト様」

「ん」

悩んでいるとソラが口を開いた。

「じゃあみんなでかくれんぼしようよ」

「ソラこんな広い屋敷の中でやんのか！？」

「そうだよ」

「そんなあつさり言われても。鬼は絶対キツイぞ」

「そうだよソラ。」

「かくれんぼって年でもないしな」

「リクト様も乗り気じゃないみたいだし」

「リつちゃんわたし胸デカいよ」

「かくれんぼは苦手です」

ミラ、ルリ、サナ、アミ、ユカに続いてメイドたちはやる気がないみたいだ。

「ふーん。ご褒美をつけようと思ったんだけどなあ」

「ご褒美ってなんだ？ソラ」

「一番最初にリつくんを見つけた人にはリつくと1日デートできる権利を与えるってね」

「ム、ムチャクチャだな。なあみんな」

「かくれんぼ大好き」

「かくれんぼしたいお年頃だし」

「リクト様も乗り気だし」

「リつちゃんも胸デカいし」

「ねえーよ!!」

「見つけるのは得意です」

みんな乗り気になっちゃったよ。なぜなんだ。オレなんかとデートして楽しいわけないのに。

「…はあ」

「じゃあルール説明するよー。鬼はここにいるメイドたち全員」

ソラからかくれんぼについて説明が始まった。

「まずりつくん一人に対してメイドの数が多すぎるの」

「多すぎるって言ったってどうすんだよ」 確かにオレ一人見つけるのにこのメイドの人数はヤバイ。

「だから今から説明するの。黙って聞いてて」

「わ、わかってるよ」

「まずグループを作るの。1チーム5人編成で戦って見つけたチームが勝ち。」

「組むのは誰でもいいの?」

「うん。かまわないよ」

「でもデートできるのは一人でしょ。1チーム5人もいるのにとっするの?」

ミラがズバリの事を聞いてきた。

「そうだね。そしたら1日一人って事で分ければいいよ」

「そう。なら今は嫌でもチームワークが大事って事ね。」

「あの～説明中悪いんだけどこの人数相手に隠れ通すのはキビシ
いんだけど…」

「ん～じゃあどうしょっか？」

どうする。かくれんぼに勝つにはどうすればいい。

「じゃあさ誰かりっちゃんのパートナーやればいいんじゃないの
ー」

“ピクッ”

「おーアミにしてはナイスアイデアじゃねーか」

「確かにいい案だわ」 “ザワザワ”

「みんな静かにして！えーではアミの提案に賛成の方は手を上げ
て」

“ビシッ”

メイドたちの手がキレイに上がった。

「でも問題はパートナーをどうやって決めるかよね」

「えー提案者のあたしじゃないのー！？」

「そんなわけねーだろ」

「ソラ、決め方はどうするの？」

「くじ引きで決めましょう。りっくんもいいよね」

「お、おう。でもソラ、パートナーに選ばれた人はどうすんだ？」

「りっくんと最後まで隠れられたらその人の勝ちって事でいいよ」

ね

「なるほどな…」

「じゃあ、くじ引きを始めるよ」

（わたしになれ〜）

メイドたちの思う事はただ一つ。

結果発表

「くじ引きの結果サナちゃんに決まりました」

「わたし！よ、よろしく願いします。リクト様」

「うん。よろしくサナ」

サナはみんなに見えないように小さなガッツポーズをした。

「ソラとつと始めちまおうぜ」

「そうだね。じゃあ最終確認するよ。わたし鬼側は一時間以内にリつくん、サナちゃんを見つける。リつくんたちは一時間鬼から隠れる。わかった！？」

『イエーイ』

メイドたちはこれから始まるかくれんぼが待ち遠しいみたいだ。

「サナ姉手加減しないからな」

「本気で行きますよ」

「あたしが提案者なのに〜。覚悟してよねサナ！」

「フツ！お前たちに負けるわけないだろ」

サナたちが言い合いしてるところにソラが来た。

「かくれんぼを開始するまで二十分の隠れる時間をあげる。せいぜい頑張つてね。サナちゃん」

「サナも頑張れよ。わたしはリクト様と二人きりで仲良く隠れるから」リクト様行きましょ」

「う、うん」

サナはリクトの腕を掴み広間から出て行った。

（絶対見つけてやる！）

サナ以外のメイドたちは同じ事を思った。

最後に笑うのはいつたいだれなのか。リクトを賭けたかくれんぼが始まる。

第三話：秘密基地（前書き）

今回は過去話があります。

第三話：秘密基地

メイドたちは次々にチームを組んでいく。普段リクトを狙い敵同士でも今回は別。

ミラ、ルリ、アミ、ユカ、ソラもチームを組んだ。

「今回はイヤイヤ組むんだからな！」

「わたしだつてあんたと組むは今回が最初で最後よ！」

「二人ともやめなつて！」

「うるさいッ！！ムツツリ女！！！」

「ム、ムツツリじゃないし！！！」

ユカはムツツリなのだ。

「仲いいのか悪いのかわかんないね」

「確かにそうだね」

アミもソラも呆れたようにつぶやいた。

ミラとルリが火花を散らし続けているとソラが口を開いた。

「みんなちよつと聞いて。」

ミラとルリはにらみ合いを止めソラの言葉に耳を傾けた。

「いい見つけたらすぐに知らせて。サナちゃんには負けない！」

『う、うん』

ソラはリクトには優しいがメイドには冷たかったりする。キレるとスゴく恐ろしいという噂もある。

ミラたちはきつと何か感じたのだらう。

「もうすぐ二十分たつわ。準備はいい！？」

ソラはメイドたち全員に問いかけた。

『イエーイ』

「かくれんぼ開始!!」

サナはリクトを引つ張りながら広間に出るとモクモクと進み続ける。

「サ、サナどこに隠れるつもりなの？」

「ここにいるメイドたちは屋敷内の構造を完全に把握しているでしょう。一カ所を抜かして。リクト様もご存知でしょう?」

「そっか!! あそこならみんなは知らないはず。隠れ通す事ができるね」

サナは勝利が見えたのか顔には笑みが見えた。

「リクト様…その 勝ったらデートの事覚えておいて下さいね」

そっだ。勝っても負けてもデートはしなくてはいけない。

「う、うん。ちゃんと覚えておくよ」

「はいッ」

サナは先ほどの笑みとはどこか違う心から出た笑顔だった。しかしリクトはその事には気がつかなかった。

「二十分たつ前に早めに行きましょう」

「そっだね」

リクトとサナはメイドたちが知らないであろう場所に向かった。

メイドたちは次々に広間から出て行った。ミラたちも手分けして探しに向かった。

（そうだ！リクト様の部屋に行こうつと、別にやましい気持ちじゃないもん。部屋に隠れてるかもしれないし〜）

ミラはやましい気持ちでいっぱいだ。早足でリクトの部屋に向かう。

（リクト様の部屋を独り占めしてやる）

不気味な笑みをこぼしながら部屋を開けると――

「リクト様のヘッドだ〜」

「リ、リクト様のパジャマ…」

――どてッ！！

「ん、なにしてんだ？ミラ」

「そ、それはこっちのセリフよ…」

転んだ拍子に鼻でもぶつたのか鼻をさすりながら答える。

（迂闊だった…。リクト様の部屋は完全防音でコイツらの声が聞こえなかった）

リクトの部屋にはルリ、ユカがいた。

「あんた達そんな事してるとリクト様に言っちゃうからね」

ミラの言葉にルリとユカは目を合わせ口元が少し動いた。

「…そうか。それは残念だ。なあルリ？」

「そうだね。スゴく残念だよ」

「残念残念てなにが残念なのよ」

「いや、ミラには関係ねーから」

「そう。ミラには関係ないよ」

「さつきから何なの！？気になるじゃない。教えてよ！」

（（食いついた））

ルリとユカは以心伝心した。

「いや、もしかしたらミラもリクト様の部屋に来ると思ってなあ」

「あらかじめリクト様の所持品を用意していたの」

「ふん！！何かと思えば物でわたしを釣ろうなんて甘く見ないでよね！」

「そうか。じゃあユカこれ二人で分けような」

「そうだね」

ミラは興味ないフリをしながら横目でルリの手元を見た。ルリの手元にはリクトが毎日つけてる日記帳があった。

「ユカ行こ——ビシッ！！」

ルリは気がつくと言った日記帳が手元からなくなっていた。

「あーこれずっと見たかったのよねっ」

ミラはルリとユカを気にせず浮かれている。少したつと現実世界に戻って来たのかルリたちの前ではずかしい所を見られたのがショックなのか顔を赤くしたまま固まってしまった。

「お前も共犯だなっ」

ルリの言葉にミラは言い返す事が出来なかったがルリたちにはめられたとわかると文句を言おうと振り返ってみると

“パチンッ”

ルリとユカがハイタッチしていた。ハイタッチが終わるとルリはミラの手から日記帳を奪った。

「これは没収なっ」

「な、なんでよ!!」

「プライバシーだよ。それともミラがリクト様の日記帳を盗んだってリクト様に言っちゃうぞっ」

完全におちよくってるルリに腹立つもののそんな事をされたらリクト様に嫌われてしまう。

「…わかったわよ」

ルリとユカの勝利。

（覚えてなさいよっ）

ミラは顔に出さないように仕返しを決意した。

「あ！！！」

ミラは思い出したように言った。

「こんな事してる場合じゃないわよ！リクト様を見つけないきゃ！」

「そうだった！ユカ今どれくらい時間たった！？」

「約二十分ぐらい」

「クッソー！早く見つけなきゃ！手分けして探すぞ」

ルリの言葉にミラとユカは頷きリクトの部屋を出て行った。

ここ倉原家の屋敷はカラクリがいくつかある。オレが小さい時、家の中にあるカラクリを喜んだ事が嬉しかったのか父さんはカラクリをいくつか作った。まあほとんどのカラクリはメイドたちにバレているけど…。

今オレとサナがいる所は唯一メイドたちが知らないであろう場所だ。

なぜメイドたちがこの場所を知らないかと言うと…。

「…久しぶりですね。この場所に来るのは。」

「そうだね。懐かしいなあ」

オレは小さい時、自分の部屋とは別に無駄に広い遊び部屋によく

行っていた。ここにはおもちゃもゲームもあるし走り回れる広さがある。疲れたら寝れるようにベッドもあった。

ある時、父さんはやけに笑顔でオレと一緒に遊び部屋へ行った。

「お父さんどうしてそんなに笑ってるの？」

「はは、知りたいかあ？」

「うん。知りたい知りたい！」

「よし。じゃあそのベッドを動かしてごらん。動かしやすいようにキヤスターを付けておいたから」

「うん。よいしょっ！！」

小さい自分にはキヤスターがあっても少し重かった。

「ん。お父さん 何もないよ」

「まあ見つけるのは難しいからね。ここを見てごらん。」

父さんが指を指した所を見ると一枚めくれる床があった。床をめくるとボタンがあった。

「このボタンを押すんだ。ほらリクト押してごらん」

「うん！」

“ポチッ”

ボタンを押すと床が動き出し地下につながる階段があった。

「わあ、スゴいね、お父さん。」

「そうだろ」この事はお父さんとリクトだけの秘密だぞ」
「うん！秘密だね」

カラクリ好きな父さんが何日もかけて作ったのだろう。階段を降りると部屋があった。特別、部屋に何かあったわけじゃないが今までのカラクリとは比べ物にならないくらいすごかった。

「僕ここ秘密基地にするよ」ありがとうお父さん」
「喜んでくれたかりクト。よかったよかった」
父さんはスゴく喜んでいた。

「そうだリクト。階段を降りたら右側にボタンがあるからそれを押すんだ。そしたら床が元に戻るからバレないぞ」
「わかった。ありがとうお父さん」

オレはそれからよく秘密基地へ行くようになった。

オレはいつものように秘密基地へ向かった。向かう途中にサナに会った。

「リクト様どこに行くのですか？」

当時のサナはまだ子供なのにすでに優秀だった。

「ちょっと遊でくる」

「遊びもいいですけどお勉強もしないと」

「あ！！そうだ。サナもついてきなよ」

「え！」

「ほら早く早く」

オレはサナの腕をとり遊び部屋へ向かった。

「秘密基地ってここですか？」

「ううん。ほらこの床見て。」　オレは父さんのカラクリをサナに教えた。

「この階段を降りると秘密基地があるんだ。」

サナと階段を降り部屋に入る。

「ねえスゴいでしょ!？」

「はい！でもよかったのですか？私に教えて」

「うん、サナいつも優しくしてくれるからお返しだよ!」

「ありがとうございます」

その日は秘密基地でサナと遊んだ。秘密基地から自分の部屋に戻る途中ソラに会った。

「あ！リつくんどここにいたの!？遊ばーと思ったのに」

「秘密基地だよ」

「秘密　基地？」

「うん」

ソラは秘密基地について聞こうとしたがリクトは自分の部屋の方に走って行った。

「あ！ちよつとりつくん！もう」

（秘密基地って言ってたけど今、遊び部屋から出て来たよね）

「まあいいや。待って〜りつくん」

この時オレはソラにヒントを与えてしまっていた。その事がかくれんぼにどう響くか予想もつかなかった。

かくれんぼ残り時間40分

第四話：かくれんぼ終了

屋敷が広い事もあってメイド達はまだリクトを見つけられず이었다。

ある部屋では

「リつくーん。…ここにもいないか」

なぜか浴場では

「リつちゃんゝいるわけないか。アハハ」

（リクトを見つけるのがこんなに大変だなんて）
ほとんどのメイドが同じ事を思った。

「もう二十分くらいたつね」

「そうですね。何事もなく早く終わってほしいです」

「そう？ドキドキして楽しいじゃん。それにサナとこうして二人きりで話すの久しぶりだしねゝ」

「リクト様」

サナは今、確実に顔が赤くなっているだろう。

「サナ」

「は、はい」

「スカート寒いでしょ？」 「い、いえそんな事は」
「ムリしなくていいよ。ここ地下だから少し肌寒いんだ。」

リクトはそう言うのと立ち上がりなにかを探し始めた。

「たしか毛布があつたはずなんだけど。あ！あつたあつた♪少しホコリつばいけどないよりいいだろう」

「サナ。ハイ毛布」

「リクト様は使われないのですか？」

「うん。サナ使いなよ。寒いでしょ」

「でも」

サナはいきなり立ち上がりオレの近くまで寄ってきた。

「二人で使えばリクト様も寒くないですよね♪」

「サナ…ありがとう。やっぱりサナは優しいや／＼／」

「いえ…／＼／」

（優しいのはあなたの方です。リクト様 私はあの時からずっとあなたの事が…）

「サナ」

「は、はい！？」

「かくれんぼ勝てそうだね」

「はい！」

（絶対に勝ってデートしましょうね）

サナはかくれんぼ早く勝ちたいという気持ちとリクトとこのまま
でいたいという気持ちが交差していた。

「おかしい。どこ探してもいない！」

「なあもう探してない場所なんかなくないかあ」

「たしかに。もうすべての場所を探したはずよ」

メイドたちはすべての場所を探し広間に集まっていた。

メイドたちはリクトがどこにいるかわからず焦っていた。

「もおどうすんだよ！残り時間少なくなってるのに探す場所がもうないなんて」

「わかってるわよ！だからみんなで話し合ってるんじゃない！」

「二人とも落ち着きなよ」。焦ってもしょうがないじゃんか」

「そうだよ。今は落ち着いて考えなきゃ」

ミラ、ルリに落ち着けと言うアミ、ユカも表に出さないだけで焦っているはずだろう。みんなが焦っているなか、一人だけ焦っていない奴がいた。

「なあソラどうすんだよ？」

「……………」

「無視すんなよ！」

（おかしい。かくれんぼが弱いリつくんがいくらサナちゃんと一緒にだからってここまで隠れられるなんて。もう探す場所なんて…）

『あ！リつくんどこにいたの！？遊ぼうと思ったのに』

『秘密基地だよ』

『秘密…基地？』

『うん』

（そうだ！！まだ探してない場所があった。でも秘密基地ってどこに……。待って……。たしかあの時りっくん遊び部屋から出て来てた。もしかしたら……）

ソラは何かを確信したように笑みをこぼす。

「フフフッ」ユカ残り時間あとどれくらい？」

「あと十分だけど……」

「ありがとう」

「ソラどうしたんだよ！？いきなり笑い出して」

「ミラ、ルリ、アミ、ユカ聞いて。遊び部屋へ行くよ」

「ソラ、遊び部屋はもう何人かのメイドが探してあるわよ」

「いいからついて来て！」

「……わかったわよ」

「急ぐよ」

ソラの言葉にミラ達は遊び部屋へと向かった。他のメイド達も反応が遅れたが遊び部屋へ向かった。

「何人か上に来たみたいだけど全然バレないね」

「そうですね。足元を探すなんてかくれんぼじゃありませんから」

「あと残り十分くらいかあ」

「そうですね」

（せっかくリクト様と二人きりで、しかも隣り合っているのに。

もつと何か言わなきゃ！)

「あの リク

—— バタンッ

「「ッ！！」」

「カギ閉めて！ほかみんなが来ちゃう」

ソラの言葉に最後に入って来たユカがカギを閉める。

「ちよつとー開けてよ！」

ほかのメイド達が叫んでいるが無視するソラ達。

「まあ勝負事だからねえ」

「それよりソラ。ここにリク様がいるとは思えないんだけど……」

「そうだよ。どう見たって人の気配なんかしねーぞ」

「ううん。絶対にいる！この部屋じゃなくても何か仕掛けとかあるかもしれない」

「まあもう他にアテがないしね」

ソラ達は仕掛けを探し始めた。タンス、おもちゃ箱、机、ベッドなど。しかし、仕掛けらしきモノは見つからないでいた。

「秘密基地の事バレたのかな！？」

「いえ、それはまだ大丈夫でしょう。仕掛けを探しているようで

すし」

「そっか。なら安心だね」

「安心するのはまだ早いです。いくらわかりにくい仕掛けでも見つかるのは時間の問題かと…」

「残り三分か」

（それにしてもなぜソラの奴が！？）

「本当に仕掛けなんかあるのかよ！？」

（あのカラクリ好きのご主人様なら絶対りっくんのために仕掛けを作っているはず）

ソラはある事に気づいた。

「ねえ。この部屋のベッドっていつもアソコにあったっけ？」

「言われてみればアソコじゃないわね。いつもはもっとこの辺にあるはずよ」

そう、このカラクリはベッドを動かして元に戻せないのが欠点だ。

「マズいぞ」

ソラたちはいつもベッドがある辺りの床を見た。

「おい！その床、少し穴みたいのあるぞ！」

「ホントだ！ちょうど指の大きさくらいだわ」

「その床、上に持ち上げられるんじゃないの〜」
「そうだね！」

ソラは穴に指を入れ、上に持ち上げた。すると床の下にはボタンがあった。

「仕掛けてこれだよ！」

「早く押さなきゃ！」

「あと一分だよッ！」

ソラはボタンを押した。

【ウィーン】

すると床は動き出し地下へ続く階段が現れた。

「まさか地下があるなんて…」

「スッゴイ、この下にリッチちゃんいるのかなあ」

「早く降りわよ！もう時間がない」

ソラ達は急いで階段を降りていく。

（せっかくここまできたのに！リクト様とデートするんだから！！
早く時間過ぎてッ！）

階段の途中でドアが見えた。

「ドアがある！」

「あの中にリクト様がいるんだな」

5人はドアの前まで来た。ソラはドアの取っ手を掴み、勢いよくドアを開けた。

——バタンッ

「リつくん見いつけ

【ビー】

「え！なに！なに！」

「リクト様かくれんぼ終了の合図です」

「あ、そうなんだ」

数秒の沈黙があった。沈黙を破ったのはアミだった。

「ねえねえ、それでかくれんぼはどっちの勝ちなのかなあ」

リクト達は実質ギリギリの所で見つけられたがソラ達は「見つけた」と最後まで言えていない。

「ふう今回は引き分けだね。でしょ？サナちゃん」

「そうね、私も今そう言おうと思ってたわ」

サナもソラも勝負事には言い訳を言わない。それに今回は引き分けが正しい判決だったのだろう。

「ねえ、ちよつといい？」

「どうしたのミラ？」

「引き分けたとリクト様とのデートはどうなるの？」

「たしかに。あたしはリっちゃんとデートしたいなあ」

「ひ、引き分けなんだからデートは無しだよ！うん、無効だよ」

「なんだあ無効かあ」

「シヨツク」

「リクト様とデート」

「行きたかったです」 サナとソラ以外の4人が落ち込んでいるとサナとソラが口を開いた。

「ほら、もうかくれんぼは終わっただんからいつまでも落ち込んでないで仕事するよ！」

「そうだよ！もう戻るよ」

ソラは4人を押しやって戻ろうとした。

「わかった、わかった。だから押すなって」

「リクト様も、もう戻りましょ」

「うん。そうだね」

リクトたちも戻ろうとした時、リクトはサナがまだ毛布を持っている事に気がついた。

「あれ、サナ毛布持ってたの？」

「え！あ、いやその洗濯しようと思って」

「そっか。オレが持とうか？」

「いえ、大丈夫です」

「そう？ならいんだけどさ」

「はい」

（洗濯なんかきつとしないだろうな。だってこの毛布はあなたと一緒に使ったモノだから…／＼／）

これにてリクトとのデートをかけたかくれんぼが終了した。

ふう。久しぶりのかくれんぼ楽しかったなあ。サナ、少し寒かったから風邪とか大丈夫かなあ。まあでもみんな楽しめたみたいだから良かった。

メイドのみんなもたまには息抜きしないとね。
お疲れ、みんな。

「やっぱリクト様は優しいですね♪」

「さすがリクト様です♪」

「リクト様、風邪の心配はありません♪」

「りっちゃんの優しいところ大好き♪」

「リク様は最高です♪」

「りっくんは優しさの塊だね♪」

「お前らゝ勝手に人の心を読むんじゃねえー!!」

第五話：君達に休日を（前書き）

前回の投稿からだいぶ時間がたってしまいました。

第五話：君達に休日を

昨日のかくれんぼが終わり、また普通の日が始まる。

メイドのみんなが朝、オレを起こしに来るのは具体的な解決策が見つからなかった為、とりあえず今は自分で起きている。

「ふわぁ 起きるかぁ」

体を伸ばしベッドから起きる。服を着替え広間に向かう。無駄に長い廊下を歩き広間に着き、扉を開ける。

「みんな、おはよう」

【おはようございます。リクト様】

オレが入るとメイドのみんなは声を合わせて挨拶をしてきた。

「うん、ご苦労様。さ、食べよ食べよ」

【いただきます♪】

アミ、ユカ達が作る料理はいつ食べてもおいしい。

「リっちゃんどう？今日もおいしい！？」

「うん、スゲーおいしいよ」

「もうヤダ〜リっちゃんたらッ♪」

「静かに食えないのかよ！お前は？」

「ルリこそ口悪いんだから静かにしてなよ」

【うんうん】

「お前らうるせーよ！リクト様、たしかに私は口が悪いですけど」

「悪くないよ。ルリは優しいし、よく気が利くしね」

「リクト様 ありがとうございます」

「リクト様の前だとすぐそうなるんだから」

「何か言ったか？ミラ」

「別になにも」

オレは両親がアメリカに行ってからメイドのみんなに頼ってばかりだ。しかも、みんなは休みなんてほとんど無いし。
…そうだし」

「みんな、ちょっといいかな？」

メイドのみんなは一斉にオレの方に顔を向ける。

「何でしょうか？リクト様」

サナが聞いてきた。

「思っただけどさ、みんなって休みが殆どないじゃん？」

「まあ でも私たちメイドは好きで働いているわけで」

「スゴくありがたいんだけど、みんなが休み無しで働いてるのは大変だろうし、可哀想だよ。だから、みんなには一週間休みを与えます！！」

オレの一言にみんな一瞬固まっていた。最初に口を開いたのはサナだ。

「リクト様、私たちは別に休みなんていりませんよ！」

「そうです！私はリクト様の為に働きたいです！」

「休みなんて必要ありません！」

「リクト様、気をつかわないで下さい」

「そうだよ、リつくん。私達は好きで働いてるんだから」

「リっちゃん、あたし達が休んだらご飯とかどうするの？」

サナに続いてミラ達も言ってきた。ほかのみんなも何か言っていた。そんな中オレは静かに口を開く。

「みんながそう思ってくれてるのは嬉しいよ。でも、休む事が大事なのはわかるよね？」

みんなは静かに頷く。オレは続けて喋り出す。

「料理だつて自分で何とかする！たかが一週間だしね。だから大丈夫だよ！みんなは一週間しつかり自分の好きな事をしていいよ。実家に帰ってもいいし」

実家に帰っていいと言葉にみんなは反応した。みんなはこの倉原家に来てから一度も家に帰っていない。帰る時間が無いからだ。みんな小さい時からここに来てるから家に帰りたい気持ちは絶対にあるだろう。

「いいかい、みんな？休む事はオレからみんなへのお願いだ！みんなはオレのお願い聞いてくれるよね？」

メイド達は全員、顔を赤くしているだろう。リクトは気づいていないがメイド達はリクトの甘え口調に弱いのだ。

「…わかりました」

「ありがとう、みんな。一週間は自由にしていいいからね」

「いえ、お礼を私たちの方です。ありがとうございます」

【ありがとうございます】

「家に帰る人は二時間後に玄関に来て。見送りするから」

こうして朝食を食べ終わり、リクトは部屋に戻る。メイド達は朝食の片付けをして各々の部屋に行った。

朝食からもうすぐ二時間。オレは玄関にいた。

しばらくするとみんなが集まって来た。玄関にはみんなが余裕で集まる広さがある。見た感じ数百人はいる。

「みんな、準備はいいの？」

【はい】

「わかった。一人ずつ車を用意してあるはずだからそれに乗ってね」

庭には前もって用意してあった車が並んでいる。みんなは荷物を持ち始める。

「リクト様ありがとうございます」

「このような機会を与えてくださりありがとうございます」

「うん。たった一週間しかないけどね」

「そんな！本名にありがとうございます」

「ううん。楽しんで来てね、行ってらっしゃい」

【行ってまいります】

みんなはオレに一言ずつ話しかけ、お辞儀をして車に乗り込んだ。

今、玄関にはミラ、ルリ、サナ、アミ、ユカ、ソラがいる。

「リクト様、寂しいですが少しの間、家にいつてまいります」

「リクト様、寂しくなったらいつでも呼んで下さい。すぐ駆けつけます！」

「リクト様、体調には気をつけて下さいね」

「リっちゃん、変なモノ食べちゃダメだよー」

「リク様、一人でへ、変な事しないで下さいね」

「そうだよ、リっくん。一人で変な遊びしちゃダメだからね！そういう時は私が――」

「わ、わかった！みんな心配してくれてありがとう。しっかり休んで来て♪」

【はい。いつてまいります♪】

「行つてらっしゃい」

ミラ達も車に乗り込んだ。今、家にはオレしかない。まあたまにはいいのかもね。

「とりあえず部屋行こ」

部屋に着きベッドに寝転がる。気がつくときオレは眠っていた。

「ん 寝ちゃったのか…。もうこんな時間か。ご飯でも作るか」

時刻は午後八時を過ぎていた。

調理場に行くといつもにぎやかなアミとかユ力を含め調理スタッフがいなくてここまで静かで広いとは思わなかった。

オレが一番近くの調理台を使う事にした。

「つーかオレ料理した事ないんだよな。とりあえず食材で決めよう！」

食材を見に行くとスゴい量の食材があった。逆に選べない。

「ま、まあチャーハンくらいならきつと！」

たまごと適当に野菜を持つてくる。

「野菜は細かく切ればいいよな」

野菜を適当に切り、フライパンに油を入れ、たまごを入れた。

「早く入れすぎたかな。まあいいや。野菜入れてっ！」

野菜を少し炒めご飯を入れようとする。

「あれ、ご飯でどこだっけ！？えーと…」

強火のまま炊飯器を探す。

「あ！これだ！さすがにデカいな。…ん！？この匂い…あ！！」

急いでフライパンの所に戻ると中の具材を見ると真っ黒になっていた。

「はあこれじゃあ食べれないな」

しばらく落ち込んでいるとお腹が鳴り出した。

「コンビニでも行くか」

オレの家はセキュリティが万全で人がいなくなっても大丈夫なのだ！

家を出ると少し歩く事になるがコンビニがある。一度も行った事はないが、出かける時などよく見かける。

「ブラックカードで買えるよな…」

リクトは金銭感覚が常人ではない。

しばらく歩いていると柄の悪い男達が一人の女の子を取り囲んでいた。

「ねえ遊ぼうよ。少しでいいからさあ」

「すみません。急いでいるので！」

「いいだろ！付き合えよ！」

「痛い！離してッ！」

「おい、何やってんだよ！？」

「あ？なんだてめえは！？」

「バカに名乗る名前はないんでね。ところでその娘の手離してやれよ」

「ふん！ガキのクセに格好づけやがって。お前らやつちまえ！」

男達が一斉にオレに向かって来る。

「死ねえクソガキー！」

「はあ止めときゃいいのに」

オレは全員の攻撃を避け、一人一人に一発ずつ腹にパンチを入れた。一瞬で片付いた。小さい頃からメイドのみんなに武術習つてよかった。

「ぐわあ」

「だから止めときゃいいって言ったのに」

「このヤロ」

オレはリーダーであろう男の胸ぐらを掴み、耳元で静かに言う。

「まだやる気か？それなら次はオレ一人が相手じゃないぞ。この世から消されたいか」

「お おめえは」

「倉原リクト。倉原財閥の一人息子だ。まだやる気か？」

「く、倉原！も、申し訳ありませんでした！せめて命だけは」

女の子を含め男達は啞然としている。

「謝るのはオレじゃないだろ」

オレの言葉に男は手下どもを集め女の子に謝りに行った。

「はい。謝って頂ければ」

「アニキ！どうしたんですか！？急に！」

「そうですよ。あんな奴もう一回やれば――」

「バカ！！あの人はあの倉原財閥の一人息子だ！」

【え〜〜〜！！】

女の子を含めその場にいた男達も驚いた。

「そ、そうだったんですか。数々の無礼申し訳ありませんでした」

「別に気にしてないから。これで何か買って帰れよ」

財布の中に一万円だけありそれを男達に渡した。

「えーい、いいのですか？」

「いいから早く帰れって」

「は、はい！どうもすみませんでしたー」

男達は走ってどっかに行った。オレは女の子に近づいた。

「大丈夫？」

「あ、えつと その 大丈夫です」

「そつ。ならよかった」

「ほ 本当にありがとございました！何かお礼でも」

「別にいいって。ただコンビニに行く途中なだけだから」

「えー！？コンビニ？」

「うん。コンビニ。何か変かな？」

「い いえ！ただ、倉原財閥って言ってたので…」

「ああ、そっか。今、家にオレ一人しかいないんだ。」

「え!？」

「メイドのみんなは休みが全然ないからオレが休みをあげたんだ。」

「そうなんですか」

「うん。で、ご飯を作ろうと思ったんだけど見事に失敗しちゃったんだ。へへッ」

「フフ」そんなんですか」

「そうなんだよ!だからお腹空いちゃって。あれ、そういえばさつき急いでるとか言ってたよね?」

「あ!!--そうでした! あ の さつきは本当にありがとうがとつございました」

「別にいいよ。それより急いでるんでしょ」「はい。じゃあ失礼します。お礼はいつか必ずしますから!」

彼女はそう言うのと走って行ったかと思ったら少し行った所で振り返った。

「あの!私、エリっていいいます!」

彼女はそう言うのとまた走って行った。少しおてんばかと思わせる彼女は笑顔がとても可愛らしかった。

「送って行こうと思ったのにな。コンビニ行こ」

彼女を送ろうかと思ったが彼女の姿はもう見えなくなったからコンビニに行く事にした。

「え！コンビニ弁当ってこんな安いの！？」

コンビニに着くとコンビニ弁当の安さに驚た。驚きつつもレジに向かった。

「430円になります」

「あの コレで」

オレはブラックカードを出した。

「！！！！！！！！ かかしこまりました」 店員はとても驚いていた。

「あ ありがとうございます」

オレは家に帰り、弁当を食べて、風呂に入って眠りについた。

みんながいなくてこんなに寂しいなんてな。

「一週間はちょっと長いな」

第六話：格ゲー魂（前書き）

久しぶりです。今回は短いです。

第六話：格ゲー魂

みんながいなくなつて一日がたった。

「はあゝ静だ」

みんながいなくてここまで楽しくないのかと初めて思った。

朝ご飯は特に料理が出来ないため、パンを焼いて食べた。焼くだけなら簡単だしね。

「プルルルル」

「電話か。 はい、もしもし」

「あーりっちゃん！アミだよ。」

「アミ！どうしたの？」

「ただ、りっちゃんの声が聞きたかったただだよー」

「そっか。オレもアミの声が聞けて嬉しいよ」

「もー嬉しいじゃんかー ところでりっちゃん。ちゃんとご飯食べてる？」

「うん。ちゃんと食べてるよ」

「…そっか。栄養には気をつけてね！」

この時アミはリクトが嘘をついたと見破った。

「うん、ありがとう」

「ごめん、リっちゃん！お母さんが呼んでるから切るよ」

「わかった」

「バイバーイ」

アミの声が聞けただけで気分が明るくなった。

昼もパンを食べ、今は夕方。朝も昼もパンだとさすがに飽きる。コンビニに行くのが面倒くさいからパンを食べただけだね。きつと夜もパンになる可能性が高い。

作んのはオレだから確率よりも確実にそうだろう。

とりあえずヒマだからゲームでもするか。

オレの家にはゲームが山ほどある。みんな買ってくれるんだ。

「格ゲーにするか」

ディスクを入れゲームを起動する。

「久しぶりだからなあ。指が鈍ってるだろうなあ」

オレは初めは練習として弱い奴とやることにした。

「っしゃ！くらいやがれ！！」

久々なのにオレは前以上に指さばきがよくなっていた。

オレはストーリーモードを最初からやり今はラスボスを倒し、ウラボスを倒そうとしている。

「ウラボスのクセに対したことないなあ。——なにッ！コイツこんな技を持っていたのか！！」

ゲームに影響され口調が大げさになるオレ。

「ヤバイヤバイ！あー！ま、負けた…」

「コンテニューしますか？」

「あんな技出されたら勝てる訳がないぞ」

オレはコイツの倒し方がわからないのでネットで調べるコトにした。

「えーとなになに。倒すには

【光翼天翔拳】

を使わないと勝てない。なるほどね。で、発動条件は「

「ウラボスが覇邪滅光拳を使ってきたら。× □ ボタン同時押しする」

「なにッ！ムリだってこんなの。同時押しとか苦手だよ」

とかいいながらオレはコンテニューしますかの返事をはいと答えていた。

「よし！まずはやってみるぜ！」

『滅びよ 覇邪滅光拳！』

「今だ！くらえ……」

「コンテニューしますか？」

「するに決まってるだろ」

『滅びよ 覇邪滅光拳！』

「今度こそ！」

「コンテニュー——」

「次負けたらもうやんない。これで最後にしてやるぜ！」

オレの口調はこんなだったっけ？

『滅びよ 覇邪滅光拳！』

「いくぜツ！」

ボタンを両手で押す。

キラーン♪

画面が切り替わり見たことない画面がでてきた。

『お前に負ける訳にはいかないんだ！！』

ゲームの主人公が叫ぶ。

『な なんだこの光は！？』

ウラボスはビビっている。

『これで最後だ！！』

主人公が高く舞い上がる。

『くらえ！光翼天翔拳！！』

「くらえ！光翼天翔拳！！」

オレと主人公の魂が同調する。

『ウワアアアア！』

『やったぞ！これで世界は救われる』

いい感じにゲームをクリアすると時間はもう夜の8時だった。

「腹減ったなあ」

ゲームに夢中で腹が減っている事に気づかなかった。

「はあ。またパンか…」

さすがに三食パンだとしんどいものがある。

「まあ食わないよりはいいか」

文句を言いながらもパンを食べる。

「ふあ。さすがに昼間からゲームやってたから目が疲れたし眠いや。これ食べたらもう寝よ」

オレはパンを食べ終わると歯磨きなどを済ませ、眠りについた。

【ゴオオオ】

リクトが眠りについて数時間後、倉原家の庭はやけに車のライトで明るかった。

「なんだー！やっぱみんな考える事は一緒だね♪」

「あたりまえよ。リクト様に1日も会えないなんてツラすぎるわ」

『私も』

二人の会話に他のメイドたちも賛同する。

「とりあえずもう寝ましょ」

メイドたちは次々と屋敷に入っていった。

「…ん…みんな…」

メイドたちの夢でもみているのだろうか。リクトは寝言を言っていた。

メイドたちが帰って来た事をまだリクトは知らない。

明日の朝、どんな反応をするのやら…。

第七話：ダークメイド

「…ん…もう朝か」

昨日、9 時前には寝て気がつけばもう朝だ。

「早く寝たおかげで全然眠くないや」

オレはベッドから降り、部屋をでる。

またパンか。もう飽きたなあ。早くアミたちのご飯食べたいなあ。
考えながら歩いているといつのまにか広間の前についていた。

ガチャ

広間の扉を開ける。

『おはようございます。リクト様』

「…!!…え!?!」

今この家にはいないはずのみんながいた。予想していなかった出来事に一瞬、言葉がに詰まった。

「ど、どうしてみんながいるの!?!まだ休みは6日も残っているじゃないか」

「私たちはリクト様に1日でも早くお会いしたかったので代表してサナが口を開いた。」

「でも、それじゃあみんなは全然休めてないんじゃないの？」

「私たちは1日も休めました」

「でもたった1日じゃ！」

「私たちはリクト様の優しいお心遣いのおかげで休みなんて吹っ飛んじやいました。それに好きで働いているのです」

「で、でも…」

「ほーんとりっちゃんは優しいよね」

「だってりっくんだもん」

やけにみんなはたのしそうだ。

「ありがとう。みんな」

みんなは返事として笑いながらお辞儀をした。

「正直、みんながいないとオレ何にもできないって事がわかったよ。それにホント言うとなんが帰って来てくれてすごく嬉しいんだ」

「リクト様 私もしリクト様がご主人様で幸せです」

「あ！ズルいぞ！抜け駆けなんて」

ミラとルリが定番の言い争いを始めた。

ホントにこの2人は…

言い争いが終わるとルリと目が合った。

「リクト様。私も幸せです」

「うん。ありがと」オレもみんながいるから幸せだよ」

『／／／／／／』

オレがそう言うときみんなは顔を抑えて下を向いた。あれ？へんな事でも言ったかな？

「みんな、どうしたの？」

『な、なんでもありません！』

みんなは声を合わせて言ってきた。

「そう？ならいいけど」

（この人の言葉はすごい破壊力だわ）

メイドたちは同じ事を思った。

「みんな顔を赤くして下を向いたから心配しちゃったよ」

(そして、この鈍感さは罪だわ)

「ところでアミ。」

「なに〜りっちゃん？」

「お腹空いちゃった」

オレは満面の笑みで言った。

「／／／ あ！そ、そうだね。ちょっと待ってて」

「ありがとう」

アミは料理班を呼び準備を始めた。

「りっちゃんは私達を萌え死にさせる気なの？」

アミが厨房に行く途中オレには聞こえない声で呟いた。

『いただきます』

「やっぱりアミ達の料理はおいしいや」

「そうでしょ」

「ありがとうございます。リク様」

アミとユカが笑いながら返事をした。

やっぱりおいしい料理はいいね。しばらくパンはいらないな。

『ごちそうさまでした』

おいしい料理であつという間に食べ終わった。

さて、朝ご飯も食べたしなにしようかなあ。手伝いとかみんなには必要ないもんなあ。とりあえず本でも読むか。

「リクト様は相変わらずステキな方よね」

「ホントになあ。それに気取らない所もな」

「そうね」

ミラとルリが話している。

「あら、珍しく2人が意気投合してるわね！」

「そりゃアリクト様の事ですから」

「たしかにそうね。あの人は昔からステキな方だったから」

みんなはあらためてリクトの人としての素晴らしさを実感していた。

P r r r P r r r

「あら、電話だわ」

サナは電話の受話器を取りに行った。

「はい。倉原ですが？」

「あ、あのリクトさんいますか？」

電話の主は女の子だった。

「失礼ですけどどちら様でしょうか？」

「エリです！この前助けてもらったって言えばわかると思います」

「少々、お待ち下さい」

サナは電話を保留にして受話器を置いた。

「サナ姉、電話誰だったんだよ？」

「なに！！」

「い、いや何でもないっす」

サナは不機嫌そうに出て行った。サナはリクトの部屋を行った。

コンコン

「どうぞー」

「失礼します。リクト様。」

「サナ、どうしたの？」

「リクト様にお電話です」

「電話？ 誰だろ？」

母さん達からかなあ。

「この間、助けてもらったエリという女の子からです」

サナがやけに冷たく言うからなんか怖い。

「エリ？ あ！あの時の」

「リクト様！あの時っていったい！？」

「電話が終わったら話すよ。それより早く行こ！」

オレは待たせては悪いと思い足早に部屋から出て行く。

（あんなに急ぐなんて！そんなにエリという女の子と電話したいの

ですか？)

サナはどんどん不機嫌になっていった。

エリちゃんはどうして電話なんかしてきたんだろう？オレに何か用でもあるのかな？

オレは広間につくなり電話のもとに行き、受話器を取った。

「もしもし。オレだけど」

「あ！リクトさんですか！？お久しぶりです」

「うん。それよりどうしたの？」

「はい。この前のお礼がしたくて」

「いいよー。お礼なんて」

「いえ。ホントに感謝しているので。それで、い、今から行ってもいいですか？」

「今から？うん、いいよ」

「ありがとうございます、では、また後で」

「うん。じゃあね」

オレは受話器をもとに戻した。電話が終わるとサナもいてみんながオレの事を見ていた。

「ど、どうしたの!? みんな」

「リクト様ちゃんとさっきの説明をして下さい!」

サナがオレに詰め寄って言うてきた。

「説明ってなに? サナ姉」

「さっきの電話相手の事!」

オレはサナが妙に不機嫌になっているからこの前の事をみんなに説明した。

「——というわけなんだ」

「リクト様に助けてもらうなんて、なんて贅沢なのかしら!」

「ホントだよ! 私も助けて欲しいかったぜ」

「そういう事でしたか。それで電話の内容はどのような?」

「あーなんかお礼したいから今から来るって」

『えッ!!!!!!』

「あれ、まずかった?」

気のせいかな？みんなから黒いオーラが見えるような。うん、
気のせいだ♪だって普段あんな優しいんだからそんな事で怒るわけ
ないよね。

「どんな娘が見る必要があるわ」

「そうだな」

「リクト様をたぶらかすかもしれないからね」

「りっちゃんは部外者には渡さないよー」

「りっくんにどんなお礼をするのかなあ」

ミラ、ルリ、サナ、アミ、ソラの顔がいつもの笑顔と違う！

「リク様はそのエリという女の子に会いに行くために私達を休みに
させたんじゃない？」

『ギロツ！！！！！』

ユカのセリフでみんながオレを睨んで来た。

『そうなんですか！？リクト様！』

「ち、違うよ！あの時、初めて会ったんだよ！」

みんなからの質問に必死に答える。

ピンポーン

『来たな！！！！』

ほら、やつばみんなは黒いオーラなんてないや。だってみんなのはオーラという表現じゃ足りなすぎるよ。あれは闇だ。

逃げてエリちゃん！

ていうかなんでみんなあんなに怒ってるの？オレがエリちゃんに会っていても別に大した事じゃないし。

『鈍感にも程があります！』

「！！なんで！どうしてみんなオレの心の中読んじやうの！？」

もうどうなってんだよ。

（（好きだからです！）（

「えッ！！なんか言った！」

ていうか早くエリちゃんを出迎えなきや。

オレは玄関に向かった。

番外編：ERI・S SIDE

迂闊だった。本屋での立ち読みで時間を忘れるなんて。

現在の時刻は8時を過ぎていた。

早く帰らなきゃ。お腹も空いたし、テレビも見たいし。

私は帰路を急いで歩いていた。

「――！！ご、ごめんなさい！」

柄の悪い3人組みの男の1人にぶつかってしまった。急いでいたから確認できなかった。完全に私の不注意だ。

「痛えな姉ちゃん」

「本当にごめんなさい」

「折れちゃったかもなあ」

「そんな！たかがぶつかっただけで」

「たかがだと！！アニキに謝れ！！」

「まあいい。ぶつかった事は許してやる。」 アニキと呼ばれる男はそう言う。他の2人に不気味な笑みをみせた。

不気味だけど許してくれるならもう行こう。

「そうですか。ありがとうございます」

私は男達を背に歩き出そうした瞬間、私の腕を掴んできた。

「帰っていいとは言っていないぜ。姉ちゃん」

男達は何かを企んでいそうな感じがした。

「許してやるから少し付き合えよ」

ヤバイ！！こいつら危険な気がする。

私は男の腕を振り払おうとした時、もう1人の男が私に言った。

「ねえ遊ぼうよ。少しでいいからさあー」

「すみません。急いでいるので！」

「いいだろ！付き合えよ！」

「痛い！離してッ！！」 私は腕を振り払おうと腕を振った。でも男の力には勝てなかった。

「おい！なにやってんだ！？」

突然、声がした。

見ると私と同じ年くらいの男の子が立っていた。

私は何もすることが出来ず、ただ事の一部始終を見ているしかなかった。

ただ、途中で彼が名乗った《倉原リクト》という単語に男達と一緒に驚いた。

倉原リクトってあんなお金持ちのお坊っちゃんごくごく普通の一般庶民である私を助けてる！！

男達は最初の威勢はどこにいったの？っていうくらいに弱腰になって帰って行った。

男達がいなくなると彼がこっちに歩いてきた。

「大丈夫？」　話しかけられて、なんていっていいかわからない。

「あ、えっと　その　大丈夫です」

「そう。ならよかった」

すごく優しくそんな笑顔で喜んでくれた。
か、可愛い／＼／

ってそうじゃない！お礼しなきゃ！お礼を。

「ほ　本当にありがとうございました！何かお礼でも」

「別にいいって。ただコンビニに行く途中なだけだから」

「え！？コンビニ？」

「うん。コンビニ。何か変かな？」

あの世界でもトップクラスのお金持ちなのにコンビニ？

「い いえ！ただ、倉原財閥って言うたので…」

「ああ、そっか。今、家にオレ一人しかいないんだ。」

「え！？」

「メイドのみんなは休みが全然ないからオレが休みをあげたんだ。」

「そうなんですか」

「うん。で、ご飯を作ろうと思ったんだけど見事に失敗しちゃったんだ。へへッ」

そうなんだ。家がお金持ちってだけで私とかと大して変わらないんだ。そう思うと身近に感じて自然に笑いがこぼれた。

「フフ」そんなんですか」

「そうなんだよ！だからお腹空いちちゃって。あれ、そういえばさつき急いでるとか言ってたよね？」

「あー！そうでした！あの さつきは本当にありがとございまして」

「別にいいよ。それより急いでるんでしょ」

「はい。じゃあ失礼します。お礼はいつか必ずしますから！」

私は急いで歩き出した。あ！私まだ名前言ってなかった。そう思い振り向くと彼はまだその場に立っていた。そりゃそうだね。

「あの！私、エリっていいいます！」

私は彼に聞こえる声で名前を名乗った。私の事を忘れてほしくなかったし、それに これからも縁がありそうだし♪

私はまた歩きだした。

「 倉原 リクト」

私は無意識にも彼の名前をつぶやいていた。

あれ、なんだろう？この気持ち…。

「ただいま」

「あら、遅かったじゃない？」

「ちょっとね」

私は家に着くとお母さんと軽く会話をし部屋に行った。

「はぁ。疲れた」 彼の事を考えたかったけど眠気には勝てなくてその日は寝てしまった。

「行って来ーす」

「行ってらっしゃい」

私は家を出て学校を目指す。今日は金曜日だから1日頑張れば休みだ。

しばらく歩いていると見慣れた顔があった。

「エリ、おはよー」

「おはよう。シホ」

シホとは小さい頃からの幼なじみで親友。特徴といえばカールのかった髪の毛と…立派に膨らんだ体の一部な気がする。ホントうらやましい！

「エリ、早くしないと遅刻したやうよ」

「いめんいめん。行く」

2人で学校を目指して歩き出した。

「えええ！！！！！！！倉原家のお坊っちゃんに助けてもらった！？」

ところ変わって今は昼休み。シホとお弁当を食べていた。

「ちょ、ちよつと！声が大きい！」

「ご、ごめん。でも倉原家のお坊っちゃんがエリを助けたって聞いたらしい……」

私は昨日の事をシホに話した。

「ちゃんとお礼した？」

「まだなの。だから明日行こうと思って」

「相手はすごいお金持ちなんだから生半可なお礼じゃダメよ！」

「そんな事言っただって私はごくごく普通の庶民だよ」

「関係ないわ！モノがダメならエリの裸——」

「バカあー！！そんな事できるかあ！」

「冗談だよ冗談」

シホはエヘへと笑ってごまかしているけどたぶん本気でしょ。
ったく本当に変態なんだから！

「シホに言っただのが間違いだったよ」

「ごめん〜エリ。お願い！許して」

「もう。別に怒ってなんかないよ」

「ホント！ありがとうー」

シホはそう言つと再びお弁当を食べ出した。

「もう」

帰ってから考えるかな。お礼については。

「よし！材料は揃った！」

私は帰る途中にひとつの結論に導いた。

「手作りクッキーを渡す」

そうと決めたらすぐ行動。明日渡すためにおいしいクッキーを作
っちゃうんだから！

クッキーを形を使ってくり抜いて焼き始めたと同時に母さんが帰ってきた。

「ただいま。あら、クッキー？」

「おかえりー。まあちよつとね」

お母さんはにやけてんいたけど特にツッコンではこなかった。

チン

「できたー♪」

んゝいい匂い！これなら大成功だね。

「お父さん達に食べられないようにしなきゃ」

私は冷めるのを待ち、クッキーをプレゼント用に袋に詰めた。

「喜んでくれるかなあ。」

そんな事を考えつつその日は寝た。

「——はッ！！」

寝過ぎた！今何時！？

時計をみると針は10時を指していた。

「よかった。まだ大丈夫ね」

私は用意を済ませていつでも出かけられる状態でいた。

「やっぱ事前に電話しといた方がいいよね。あー緊張する!」

でもやるしかない!私は電話帳で調べ電話をかけた。

相手がでたら

「お忙しいなか申し訳ありません。先日、そちらの――」

といった具合で好印象を与えて、

『はい。倉原ですが?』

わあ!お、女の人がでた!え、えっと さっき私なんて言おうと
してたっけ!?とりあえず何か言わなくちゃ!これから会いに行く
んだから!こんなところでつまづいてなんかいられない!

待って下さい。

私の初恋の人」

「あ、あのリクトさんいますか?」

番外編：ERI・S SIDE（後書き）

番外編という事でエリの話を少し書きました。

いかがだったでしょうか？

第八話：大切な絆（前書き）

前回からだいぶ時間があいてしまいました。久しぶりの駄文みて
ください（＾－＾）v

第八話：大切な絆

「まあとりあえず座つてよ」

オレはエリちゃんを玄関まで向かいに行き、客間に通した。

「は、はい！」

エリちゃんはやけに緊張しているように見えた。

「緊張なんかしないでいいよ」

「はい。でもさっきから視線というかその…」

口をおぼつかせてエリちゃんは言った。たしかにこの状況で緊張するなと言う方が無理かもしれない。

だって――

「お茶でもどうぞ」

ミラが怖い笑顔でお茶を持ってきた。ミラだけじゃない。ほかのみんなも広すぎる客間に立ってオレたちを見ていた。客間に入らない人たちは廊下からのぞき込むように見ていた。

エリちゃんは下を向いていた。この大人数の前で話とかできるわけない。

「みんな、ちょっといいかな？」

みんなは「はい」と言いながらオレに目を向ける。

「少しの間2人にしてくれないかな？」

「そんなぁ！」

「リクト様！」

ミラとルリが声を合わせて言ってきた。

「こんなに人がいるとき、エリちゃんも話したい事話せないでしょ」

『うッ！』

みんなはなぜか胸を押さえた。

どうしたんだろう？ただ、上目づかいしただけなのに…。

「…ズルですよ。リクト様は…」

「反則ツスよ」

「え！な、なにが！？」

『ハア…』

「なに！？そのため息！」

（この鈍感坊ちゃまは…）

（こうやって人を虜にしていくんだ…）

みんなはため息をつくしエリちゃんは苦笑いだし…。なんで？

「…わかりました。出ていきますよ」

サナが言ってきた。さすがサナ！

「ありがとう。サナ」

「見返りはデカイですよ」

「ハハ…わかったよ」

サナに続きみんなが客間から出て行く。

気のせいだろうか？みんなの顔がやけに笑顔なのは…。

「ごめんね。騒がしくて」

「い、いえ！皆さんとても優しそうで！」

「そうだね。みんなすごく優しいだ。それですごく面白い」

「皆さんとは…長いんですか？」

「うん。オレが小さい時からだから」

「そんなに長いんですか！」

「すごいでしょ？みんなオレより少し年上なだけなのに子どもの頃からオレの世話してさあ」

みんなの話をしていると自然と笑顔になってくる。

「ところで今日はどうしたの？」

「あ！そつだ！あの…この前のお礼を…」

「そつか。わざわざいいのに」

「いえ！本当にたすかったので。それでクッキーを焼いてきたんですけど」

「ホント！ありがとう」

「お口に合うかわかりませんが」

オレはエリちゃんから上手に包装された物を受け取り、開けてみた。

「わあ！美味そー！」

オレはクッキーを一枚とって食べる。

「スッゴい美味しいよ」

「ホントですか！？」

「うん。ほら、エリちゃんも食べなよ」

オレはクッキーを一枚とってエリちゃんの口元に近づけた。

「／／／／ は、はい！」

「美味しいでしょ？」

「はい」

エリちゃんのクッキーを食べながらオレたちは会話を盛り上げていった。

今、私たちは広間にいる。

私は誰かって？

サナよ。

「それにしてもリクト様も女殺しだよな」

「たしかに。しかも自覚がないんだから」

「そこがりっちゃんのいいところだよ」

「それにしてもサナちゃん。案外早く引き下がったね」

「甘いわソラ。私はあの場で2つ仕掛けをした！」

「仕掛けってなんですか？サナ姉」

「いい事を聞いてくれたわミラ。私はあの客間に事前に盗聴器を設置しておいたの。それともう一つは見返し」

「なるほど！リクト様たちの会話も聞けて、しかもリクト様からの見返しもある！」

「鋭いわねユカ。ユカの言った通りよ」

「うわあ！すつげえサナ姉！」

「さすがサナ姉ですね」

みんなが私を褒めている間に盗聴用スピーカーを取り出しスイッチを押す。音量を最大にして全員に聴こえるようにする。

スピーカーからはリクト様とエリと名乗る女の子の笑い声が聞こえてきた。

『あはは、そうなんですか！』

『そうなんだよ！それでさあ——』

「あー！りっちゃんがわらってる（怒）」

「いい子そうに見えてりっくんをねらってるなあ（怒）」

「あんた達は嫉妬しすぎよ」

それにしても本当に楽しそうに笑ってるわね。やっぱり私たちメイドより同年代の女の子の方がいいのかしら…。

「はー クッキーおいしかった」

「褒めて頂いてありがとうございます」

「こっちこそありがとう！」

「はい！ あの、リクトさんのご両親は？」

「海外だよ。オレがまだ6歳くらいの時から」

「そんなに！？」

「うん。だからもう10年くらい会ってないんだ。まあたまに電話くれるけどね」

「そうなんですか。すみません」

「いいいいいよ。小さい頃は寂しかったけどだいぶ前から平気なんだ」

「どうしてですか？」

「みんながいるから」

「みんなってメイドの皆さんですか？」

「そうだよ。オレが寂しい時はずっと一緒にいてくれたし、一緒に笑ってくれたし」

オレは紅茶を一口飲み、話を続けた。

「みんながいたからこそまでこれたんだよね。でも、みんなオレにツライ顔を見せないけど本当はツライ時だったたくさんあったはずなんだ」

また紅茶を飲む。ミラが入れてくれた紅茶はすごく美味い。

『……』

私たちは無言でリクト様の話を聴いていた。

『なのにオレはワガママばっか言うから大変だったはずだよ』

『ワガママって例えば？』 『料理の好き嫌いとかさ、せっかく遊んでくれてるのにつまんない！とかね』

『やんちゃな子どもですね』

『終いには母さんと父さんき会わせろって泣いたりしてたんだ』

『そうなんですか。でもそれって仕方ないですよ！小さい時に両親
がいないのは寂しいですし』

『そうだね。でもそれが毎日だと大変だよね』

『毎日 ですか』

『そう。ホント迷惑かけたよ。はは』

『じゃあいつから泣かなくなっただんですか？』

『オレが夜中に突然泣き出してんだ。母さんたちに会いたくて。そ
したら夜中なのにみんな慌ててきてさあ——』

「お母さん。お父さん」

「リクト様大丈夫ですか!？」

「サナあお母さんたちに会いたいよ」

「リクト様。あなたのご両親はアメリカです。だから会う事はでき
ません」

「うつつ」

サナは小さい体でリクトを抱きしめた。

「私たちはリクト様のそばにずっといます。なにがあっても」

『——その後から自然と泣かなくなっただ』

『そうなんですか』

『それからはみんなの困り顔じゃなくて笑顔が見たくてさワガママもあんま言わないようにしてるんだ』

『リクトさんは皆さんに感謝してるんですね』

『うん。感謝してもしきれないけどね』

「リっちゃん」

「リクト様」

私たちはリクト様の会話で涙していた。リクト様がこんなに私たちの事を思ってくれてたなんて。

『リクト様と皆さんはすごい絆で繋がっているんですね』

『そ、そうかな?』

『そうですよ。だって皆さんの事すごく大切にしてるし、それに

大好きなんですよ？』

『大好き♪♪』

私たちはリクト様の言葉を聴いて走り出していた。誰が言ったわけじゃない。ただ、リクト様に会いたくて仕方がない。

ガチャ

「リクト様〜」

「りっちゃん〜」

「りっくん〜」

「リク様〜」

私たちはリクト様に泣きながら駆け寄った。

『私たちも大好きですー』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9182p/>

スマイル メイド

2011年10月8日13時46分発行